

ゆびずもろうのすゝめ

私がまだ小学生の低学年の頃、世の中は、高度成長時代だった。父は、多くのサラリーマンと同じように、モータース社員として働いていた。朝は私が起きた頃に家を出て、夜は私が夢の中にいる頃に帰ってきていた。いまのように、土日が休みというのではなく、週休一日制だった。だからこそ、父親と遊びたい盛りの私は、日曜日が待ち遠しかった。

日曜日の朝は、特別だった。台所に立つ母が朝食の仕度をする間、

私は日頃ゆつくりと接することのできない父との時間を楽しんだ。

ある時は、朝刊にはさまれていた折込チラシで、紙飛行機を折ってもらった。いくつもの、いくつもの、作ってもらい、部屋中に飛ばした。

ある時は、腕相撲をした。負けても負けても、もう一回、と挑んだ。

そして、ある時は足相撲をした。とにかくスネが痛かった。

そんな中で、私が好きだったのが、ゆびずもろうだ。

倍以上もある、まるでそり立っているかのような父の大きな親指に挑戦する。

ちよこまかと親指を動かす、父の親指に触れては逃げ、逃げながらも勝機を伺う。

勝ち負けもそうだが、その駆け引きが楽しかった。そう記憶している。

月日は流れ、自分に子どもが生まれ、その子ども目一日と成長してきた。

ある時、ゆびずもろうを思い出した。娘と初めてゆびずもろうに興じた。

娘の小さな手が私の手をしっかりとつかんでいる。

娘の小さな親指が、私の大きな親指に挑んでくる。

その小さな親指をせつせと動かし、私の親指を

押し込めようとする。やはり、勝ち負けではない。

その駆け引き、コミュニケーションを楽しんでいた。

ゆびずもろうは、小さな子どもから楽しめる。

家でも、電車の中でも、

思いついたときに、気軽に楽しめる。

子どもとのコミュニケーションを

どうしたらいいだろう、子どもに何をしてあげよう。

そんなことを考えたときには、ひとまず、

ゆびずもろうはいかがだろう。

思っていた以上に、子どもの目が輝きます。

自分自身も、次第にノッテくるのがわかる。

子どもはかならず、もう一回、とせがむ。父親を求めてくるのだ。

父親と子どもの最も身近なコミュニケーションのひとつとして、ゆびずもろうをすすめたい。

ふとした時に「ゆびずもろうしようか？」と声をかけてみてほしい。

ほんの短い時間だが、どこにでもあるような風景だが、そこには父と子ならではの

かけがえない時間が生まれるはずだ。

私自身、父と楽しんだゆびずもろうを三十年以上経った今でも覚えているのだから、まちがいない。

それに、親指は、「お父さんゆび」とも呼ぶではないか。

ダッドガレージ代表 山本秀行

※「ダッドガレージ」では、「父の日には、ゆびずもろう！」を推進しています。